

港町百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

同じ島国でも、イギリスに自生する植物は数百種類、日本はほぼ四千種類あるといわれる。一八二〇年代長崎に滞在したシーボルトは、日本の植物を持ち出し、「フロラ・ヤポニカ（日本植物誌）」を刊行して、ヨーロッパに日本の植物の豊かさを知らしめた。しかし、日本はまだまだ鎖国状態にあった。

イギリスの植物商は、世界各地にプラントハンター（植物の狩人）と呼ばれる採集家を派遣して、珍しい植物の収集につとめていた。日本が開国して横浜・

英から来日、珍種収集

▷1◁

長崎・函館で貿易が始まると、プラントハンターが日本に、そして横浜に続々とやってきた。

ジョン・グールド・ヴィーチ（一八三九〜七〇）は、ヴィーチ王朝とも称されたイギリス園芸界でも勢力を誇った創業者の一族であった。一八六〇年に来日し、イギリス公使オルコックとともに富士登山を挙行し、オルコックが著した「大君の都」に、横浜・神奈川近郊における農業・農産物・野菜・果樹・植物相等を執筆している。

ヴィーチが日本を訪問して、プラントハンティング

した最大の成果は、「金色の光のすじが入ったユリ」といわれるヤマユリの変種リリウム・アウラトゥム・ピクトゥムを紹介したことにあると評される。また神奈川県（現神奈川区）に生える見事な円すい形を呈するコウヤマキは、再来日したシーボルトやプラントハンターのロバート・フーチンも注目したが、

「緑花」文化の国際交流は、ヴィーチをはじめとする、植物を愛し、手にし、採取することに情熱を注いでやまないプラントハンターの行動から始まるのである。

（横浜開港資料館主任調査 研究員・平野 正裕）

植物の狩人

リリウム・アウラトゥム（横浜植木株式会社編「リリー・オブ・ジャパン」1899年刊より、横浜植木株式会社蔵）



横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町 百花繚乱—横浜から広がる『緑花』文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館☎045（201）2100。

港町 百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

江戸期以来、日本人は、草花は鉢植えで楽しみ、直接地面に植えるのは花木であった。そして江戸時代の「花壇」とは、鉢植えの花の陳列台をさし、今日ある花壇（フラワー・ベッド）は、開港後導入された西洋「緑花」の文化様式であった。

浮世絵師二代歌川重画は、文久元（一八六一）年十月発行の「横浜異人館之図」で、花壇を画面の中央部に描いた。植えられた花は菊のようであるが、西洋式花壇が描かれた最も早い資料と考えられる。

開港直後の外国商館は、

「身近に植物」昔から

▷ 2 ◁

横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町 百花繚乱―横浜から広がる『緑花』文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館 ☎045（201）2100。

建物のほかに庭が確保されていたようであるが、貿易の発展と外国商人の移住によって、居留地はどんどんと狭くなっていった。また、建物の壁に植物をはわせた「壁面緑化」の事例もある。

居留地メーンストリートに面したラングフェルド＆メーヤーズ社屋は、屋上緑化の事例である。温暖化による地球危機が叫ばれている今日、やっと実用化された始めたビル冷却化の手法が、約百二十年前の横浜にすでに取り入れられていたことは、東京農業大学近藤三雄教授に指摘されるまでわかってくる。

（横浜開港資料館主任調査 研究員・平野 正裕）

西洋式花壇



横浜異人館之図 横濱開港資料館蔵



二代広重画 文久元（1861）年10月



横浜開港資料館蔵

港町百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

▷ 3 ◁

都市に居住する西洋人は公園の整備を求めた。狭い生活空間と切り離された公園(パブリック・ガーデン)で花と緑を楽しみ、憩いの場とする。一八七〇(明治三)年六月四日に開園した山手公園(現中区)は、日本最初の西洋式公園であった。

次いで整備された横浜公園(現中区)は、居留地と日本人街を分ける日本大通に接続し、防火帯としての役割をあわせ持った。日本人も憩う場で、「彼我公園」と呼ばれた。

近代以前の日本では、誰もが自由に憩うパブリック・ガーデンの観念は薄い。

誰もが自由に憩う場

あえて求めるのなら社寺地の境内であろう。桜や梅などの花の名所の多くが社寺地境内であることは、横浜の場合でも、伊勢山の桜(現西区)・杉田の梅(現磯子区)の事例に明らかである。

伝統的に日本の庭園は、公家・大名を中心に発達した私庭が基本だった。西洋貴族の庭園が花や緑を幾何学的・人為的に配置するのと比較して、いかに自然のありさまを限られた空間のなかに表現するかを重んじる。そして植える植物は樹木で、草花ではない。

ところが、横浜第一の庭園である三溪園は、生系商原富太郎により、明治三十

九(一九〇六)年より外苑部分を一般公開してパブリック・ガーデン化した。豪商の心意気であろう。

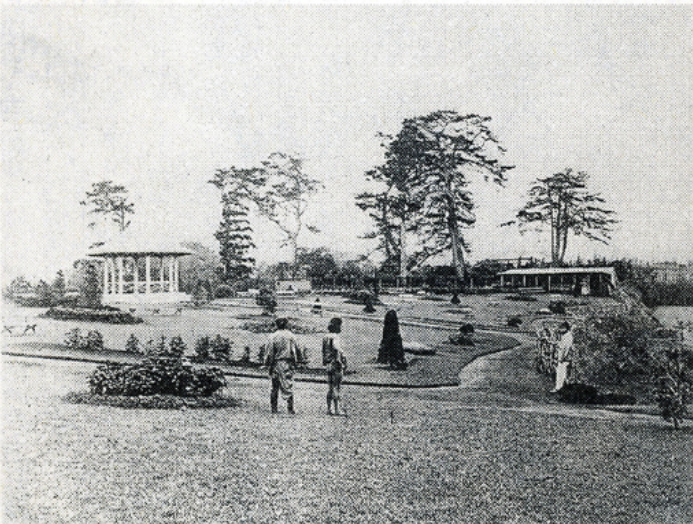
明治初期、植木屋の中から、敷地内に築山や人工の滝、迷路をつくって、アミューズメント性を高め、客の気を引く者が現れる。東京・浅草の森田六三郎が営んだ植木屋は発展し、「花やしき」遊園地として現在に至る。

横浜老松町で植木屋「四時皆宜園」を経営する川本友吉も迷路をつくったが、遊園地に発展することはない。日本人の手でユリ根輸出に力を注ぐべく、横浜植木商会の設立に結集してゆく。

(横浜開港資料館主任調査
研究員・平野 正裕)

公園整備

開園間もない山手公園「The Far East」1871 横浜開港資料館蔵



横浜開港資料館(横浜市中区日本大通)で企画展示「港町 百花繚乱」横浜から広がる「緑花」文化」を開催中。来年1月25日(日)まで。月曜休館。入館料200円(小中高生は100円)。問い合わせは同資料館☎045(201)2100。

港町 百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

日本を旅した外国人で、アメリカ人のエリザ・シドモア（一八五六～一九二八）は著名である。シドモア女史は、アイオワ州クリントンで生まれ、横浜の領事館につとめる兄ジョージをたよって、明治十七（一八八四）年初来日した。日本紀行「ジンリキシャ・デイズ・イン・ジャパン」を明治二十四年に刊行。三十五年には改訂版を出している。シドモア女史は、首都ワシントンのポトマック河畔に、日本の桜を植樹することに尽力したことで有名で

園芸文化の一翼担う

▷4◁

あるが、なによりも日本の植物を愛し、文筆の才に恵まれていた。女史は東京・入谷（現台東区）の朝顔市をみて、「尋常一般の桃色や紫やネボケタール藍色の野卑にして小さな亜米利加（アメリカ）のモーニング・グローリー（朝顔）」と嘆き、日本の朝顔を「その雑色の美しきことよ、縞あり縁取りあり、星の光を発するがごときあり…」と「艶々しくして滴るばかりの美しさは実に珍奇なる宝玉」と賛辞を惜しまなかった（驚くべき日本の朝顔）。あさがほ禮久会雑誌第一号、一九〇〇年刊）。中国から入ってきた朝顔は、江戸時代にさまざまに変わり咲きが試みられ、江戸の園芸文化の一翼を担った。モーニング・グローリーとの対比の中に、日本の豊かな庶民文化のにおいをかぎとった女史は、横浜の朝顔同好会である「薺花同好会」のメンバーとなり、全国的な変わり咲き朝顔の同好会組織である「禮久会」にも参加した。明治三十三（一九〇〇）年にはロンドン日本協会で行われた朝顔について講演している。江戸時代に花開いた

朝顔

横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町 百花繚乱 横浜から広がる『緑花』文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館☎045（201）2100。

園芸文化は、シドモア女史をはじめとして、外国人の熱意に支えられて海外でも知られてゆくことになる。（横浜開港資料館主任調査 研究員・平野 正裕）

横浜木村重太郎の
変わり咲き朝顔
（あさがほ禮久会
雑誌第6号、1903
年発行 渡辺好孝
氏蔵）



港町 百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

シドモア女史が、その著『シンリキシャ・デイズ・イン・ジャパン』（一九〇二年刊）で紹介した花の名所として忘れていけないのは川和（現都筑区）である。当時は都筑郡都田村にあり、昭和十四（一九三九）年横浜市に編入された。川和は菊で著名であった。今日菊花展に出品されるもの多くは「あつもの」と称される大ぶりの菊花である。しかし江戸後期～明治期はより小ぶりの「中菊」が親しまれた。中菊は花が咲くと時間の経過に従い花びらがねじ

はぐくまれた洗練さ

▷ 5 ◁

れ、折れ曲がる性質をもつ。これを「くるい」と称し、さまざまに変わって咲きまわりの栽培が楽しめる。朝顔と同様、江戸園芸文化の象徴でもあった。

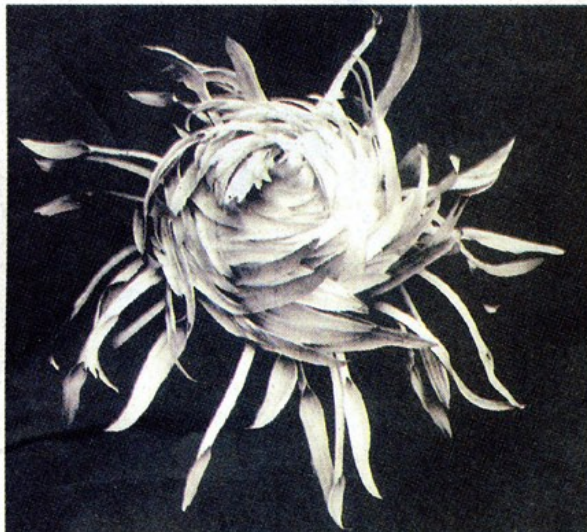
「川和の菊」の中心は菊園「松林園」を経営する中山恒三郎家である。松林園は文政末期（一八三〇年ごろ）に菊栽培を始めた。シドモア女史は「秋になると巡礼人もここを目指す。この川和コレクシヨンは多年にわたり名声を博して」いる、と書き残している。

残念ながらその花の容姿についての言及はないが、

菊

（横浜開港資料館主任調査
研究員・平野 正裕）

横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町 百花繚乱」横浜から広がる「緑花」文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館☎045（201）2100。



松林園中山家改良の菊「男山」（大日本正菊協会発行「菊の香」1910年刊、中山浩二郎氏寄贈・横浜開港資料館蔵）

港町 百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

プラントハンター（植物の狩人）がもたらした日本の植物で、ヨーロッパで熱狂的に受け入れられたのはユリだった。ユリはヨーロッパにもあったが、日本のユリほどには大輪・華麗ではなかった。ユリの球根であるユリ根が開港後、誰によって日本から持ち出されたか、貿易上、誰が最初に輸出の主体となったのかは詳しくはわからない。

大蔵省編「各開港場輸出入物品高表」明治五（一八七二）年版には、横浜港から「百合根」四十二箱、金額にして一一八円四七銭四

欧州で熱狂的人気に

▷6◁

厘の輸出が記されている。これが日本のユリ根貿易が公式に記録された始まりである。

初期のユリ根輸出を担ったのは、消費地と通じた横浜の外国商人だった。ジョン・ジョシユア・シャーム

インは英国軍の駐屯兵として横浜に来たのち、慶応三（一八六七）年、クラマー商会に入社し、ユリ根貿易を始めたとされる。アイザック・バンティングはシャームインとは知己の間柄で、黒軸テッポウユリと赤鹿子ユリを海外に紹介した。

ユリ
ルイス・ポーマーは現在

のドイツ出身で北海道開拓使お雇い園芸技師として来日。明治十二（一八七九）年、山手にポーマー商会を設立、広く日本の植物を紹介した。アルフレッド・ウ

ンガーはポーマー商会を引き受け、テッポウユリの産地を沖永良部島（現鹿児島県）に求めて、ソテツ輸出でも財をなした。

リは肥沃な土壌で生育したもののほど、船上で腐りやすかった。これに対して鹿子ユリのほうが腐敗しにくかったとされる。

しかし海外での需要の拡大は、山掘りを中心とするヤマユリから大量栽培しやすいテッポウユリへと移行してゆく。

（横浜開港資料館主任調査
研究員・平野 正裕）



「Prolific Lily（豊かなユリ）」と題された記事に貼付された写真（「The Far East」1872年9月16日、横浜開港資料館蔵）。横浜在住ピアンソンによって栽培された左のユリは63のつぼみのうち、52が一斉に開花した。

横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町 百花繚乱—横浜から広がる『緑花』文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館 ☎ 045(201)2100。

港町百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

明治政府による殖産興業政策や軍隊創出などの近代化政策は、外国から技術・装備を導入するからたちで進められ、関税自主権がない日本の対外収支は慢性的に赤字であった。

日本が外貨を獲得できる手段は乏しかった。生糸・茶を中心とする農産加工品や海産物、ヨーロッパで受容され、フランスで「ジャポニスム」を引きおこした美術工芸品、銅などの鉱産品などがあるにすぎなかった。そしてわずかも貿易の可能性があるものは、外国の需要に合致するように水準を引き上げ、日本人の

経営基盤は外国から

▷7◁

手によって輸出すべきであった。

明治二十二年（一八八九）年、全国の園芸界を

動員して日本園芸会が設立された。その意図は「本邦園芸の振起発達をはかる」ことにあったが、「諸外国の園芸会植物園と通信交換を開くこと」を事業目的の一つとしていた。日本園芸会の副会長に名をつらねる前田正名は、居留外国人による貿易を排除して、直輸出で外貨獲得をもくろむ急先鋒であった。

ユリ根貿易は外国商館の独占状態にあった。前田正名の影響のほどは不明であるが、翌明治二十三年、ボ

植物貿易

ーマー商会仕入主任であった鈴木卯兵衛、横浜園芸会の元締・飯島秋三郎、野毛に「四時皆宜園」を営む川本友吉や、東京の植木屋などが結集し、有限責任横浜植木商會が設立された。設立と同時にサンフランシスコ支店を開設してユリ根輸出を始めた。

横浜植木商會の設立に際して、ボーマー商会から巨大な温室が譲られている。新宿御苑の洋ランはそこで管理を委託された。植物貿易が日本人の手になるのは、外国商館による経営基盤の委譲があったのである。

（横浜開港資料館主任調査 研究員・平野 正裕）

横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町 百花繚乱」横浜から広がる「緑花」文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館☎045（201）2100。



New Species of Jap. Lilies found in Kaga province, with very nice small & white flowers.



横浜植木商會の海外向け植物カタログ（1890年）横浜植木株式会社蔵・横浜開港資料館保管。右は加賀地方で発見された小ぶりのユリの挿絵

港町百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

横浜植木商会は、明治二十四（一八九一）年、株式会社組織となり、二十六年に横浜植木株式会社に改称した。明治三十年に久良岐郡屏風ヶ浦村磯子（現磯子区）に菖蒲園を開設し、その苗を輸出した。先行して海外で受容されたユリは、西洋名が付けられているのに対して、花菖蒲は「笑い布袋」「月下の波」などの和名で輸出された。

明治三十六（一九〇三）年、横浜植木はより広大な蒲田菖蒲園（現東京都大田区）を開設して、磯子菖蒲園を閉じた。花

日本と外国の交差点

▷8◁

横浜植木商会

園を閉じた。花の名所の一つを失ったが、横浜植木は中村町唐沢（現南区）の自社自体が花と緑の名所であった。そのにぎわいは、「横浜名所図会」（「風俗画報」一九〇二年十月五日号）でも絵入りで紹介されている。

ユリ根貿易をおこなった商社・商店の数は少なくない。しかし総合植物商社としての横浜植木株式会社の存在は圧倒的であった。明治後期の外国向け商品カタログをひもとけば、ユリ・花菖蒲はいうまでもなく、ボタン・ツバキ・カエデ、

樹木各種、盆栽、はては高山植物や釣忍まで掲載されている。和風の鉢や石灯籠、銅製の鶴などの付属品も横浜植木の手で輸出されていた。カタロケに掲載されている植物は、入手先はもちろん、その植物に適應した荷造り方法も確立されていたことを示している。

輸入植物としては、本社 研究員・平野 正裕（横浜開港資料館主任調査員）

温室で開花・生育させた洋ラン類、水仙類、グラジオラス、ダリア、バラ、カラデュームなどが所狭しと並び、美を競った。横浜植木は、日本と外国との植物の交差点に存在した。総合植物商社として真のパイオニア企業であった。



横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町百花繚乱—横浜から広がる『緑花』文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館 ☎045(201)2100。

港町 百花繚乱

横浜から広がる「緑花」文化

明治四十(一九〇七)年、桜も終わろうとするころ、カナダに向かって一人の老人が横浜港をたった。岸田伊三郎、六十五歳。横浜市北方(現中区)在住の庭師である伊三郎は、バンクーバーに近い西海岸の都市ビクトリアにいる息子の求めで船上の人となった。渡航の目的は日本庭園を造ることにあった。当時、北米大陸では庭園を眺めながら日本茶を飲む日本茶館が少なからず造られていた。息子芳次郎はビクトリアのゴージ公園に日本茶館を経営する事業に乗り出していたのである。伊三郎はビクトリアに約

カナダに残る「遺産」

▷9◁

五年滞在し、その後、ゴージ公園はもろろんのこと、観光地として著名なブッチャートガーデンの日本庭園、現在ではロイヤルロード大学の構内にあるハトリ公園の日本庭園などを造った。伊三郎がハトリ公園を造るにあたり、横浜植木から樹木や石灯籠などを購入したことが、大学に残る資料で判明している。伊三郎が住んでいた北方と横浜植木のある唐沢とは距離も近い。総合植物商社である横浜植木に注文すれば何でもそろった。ハトリ公園のガーデナーであるポール・アリソンが今でも大切に守られていることを確認した。ハトリ公園は二〇一〇年に開園百周年を迎える。

日本庭園

同年夏、竹安氏一家はカナダに渡り、先祖の「遺産」が今でも大切に守られていることを確認した。ハトリ公園は二〇一〇年に開園百周年を迎える。

(横浜開港資料館主任調査 研究員・平野 正裕)

横浜開港資料館(横浜市中区日本大通)で企画展示「港町 百花繚乱―横浜から広がる「緑花」文化」を開催中。来年1月25日(日)まで。月曜休館。入館料200円(小中高生は100円)。問い合わせは同資料館☎045(201)2100。



現在のハトリ公園の「亀島」と呼ばれる出島に造られたあずまや。ジョン・シェリダン氏撮影・ロイヤルロード大学提供

港町 百花繚乱

横浜から広がる『緑花』文化

企画展示「港町 百花繚乱」は、横浜市花であるバラの存在が薄い。開港期（二〇世紀初頭を対象としたこの展示は、バラを主役にたてることはできない。

バラが横浜に渡来した時期は特定できない。故中野孝夫編『明治薔薇年表』（二〇〇五年）によれば、山手六三番のウィリアム・H・スミスによるイギリス産バラの日本最初の広告は、新聞『日新真事誌』の明治五（一八七二）年十月十八日以降に掲載される。スミスは山手で養豚や西洋野菜を栽培する傍ら、山手公園の開設・運営に力を注ぎ、そ

震災を機に栽培普及

▷10◁

の資金調達のためにフラワースhowを企画した人物である。

明治後期、横浜植木株式会社

は百種以上のバラを栽培した。売り込み先は不明であるが、国内に住む外国人、華族や政商・官僚などの愛好家や公園などであったと思われる。

横浜とバラとの関係が一気に深化するのは、昭和期であった。関東大震災の復興支援に対するお礼として昭和五（一九三〇）年、横浜市はアメリカ西海岸のシアトルに石灯籠を送った。その返礼として同市公園課が栽培したバラ三百種二本が届いた。

バラ

「園芸植物図譜 第十一編」（1914年刊）に掲載されたバラ。横浜植木株式会社蔵・横浜開港資料館保管



友好のバラは、昭和六年四月二十三日の復興記念日から展開された「愛市運動」のシンボルとして「愛市の花」に指定され、野毛山公園で栽培されて、広く市民の手に行き渡った。現在の国際仮装行列のもとなった「バラ行進」はバラ祭りの催しとして、昭和十（一九三五）年に始まっている（大西比呂志著『横浜をめぐる七つの物語』二〇〇七年刊）。

バラが横浜市花に制定されたのは平成元（一九八九）年で比較的新しいが、バラの栽培が市域に普及しているとはいえない。バラの愛好者は多い。昭和初期の「愛市の花」運動を見習い、栽培を振興して、横浜にあるさまざまな花の歴史を生み出さうか。

（横浜開港資料館主任調査 研究員・平野 正裕）

横浜開港資料館（横浜市中区日本大通）で企画展示「港町 百花繚乱—横浜から広がる『緑花』文化」を開催中。来年1月25日（日）まで。月曜休館。入館料200円（小中高生は100円）。問い合わせは同資料館 ☎045(201)2100。